

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	酒巻 和子
主な担当科目	音楽芸術運営特別演習②,音楽評論基礎,音楽文化研究Ⅰ,課題研究Ⅰ,課題研究Ⅲ,芸術鑑賞応用Ⅰ,芸術鑑賞応用Ⅱ,芸特応用研究Ⅱ,作曲家・作品研究,作曲家・人と作品,修士特別研究(音楽と文化)①,修士特別研究(音楽と文化)②,西洋音楽史研究Ⅱ,西洋音楽史特殊講義,卒業研究,博士研究指導
2025年の教育目標・授業に臨む姿勢	学部と短大、そして大学院で、音楽学、特に西洋音楽史に関する科目を担当している。個々の学生にはさまざまな学修歴や個性があることを念頭におきながら、どの授業でも、学生が内容をよく理解したうえでさらなる興味や関心をもって主体的な学修につなげられるように、わかりやすい解説や教材を提供できるよう努めている。短大の卒業研究や大学院の論文等についても、学生が自ら課題を設定し、自信をもって取り組むことで研究成果に結びつけられるよう指導したいと考えている。
2025年の教育に関する自己評価	2025年度のセメスター制導入とカリキュラム改訂により、担当科目も通年から半期に変わった。シラバスを検討し、各科目の学修成果を確保するように努めた。授業内発表についてはこれまで通り継続し、発表者にも聴く側にも学修効果が認められた。課題となっていた発表の時間管理も学生の協力により改善された。短大の卒業研究、大学院の修士研究、修士論文の個別指導においては、いずれも十分な成果を認めることができたと思われる。
2025年のFD活動に関する自己評価	FD副委員長として年間の企画や年間テーマについて検討した。前年度末の2月、3月に続き、新年度4月1日には学部・短大、大学院のFD合同研修会、翌2日には大学院のFD研修会が開催され、いずれの内容も充実していた。大学院FDは学位授与のあり方について考える機会となった。9月の合同研修会では、学外講師による講話により、現在大学が取り組むべき課題について改めて学ぶことができた。所属する分科会(音楽学、音楽と社会)の研修会にも積極的に参加した。
授業改善のために取り入れた研修内容	分科会FD研修会で、具体的な情報共有があった。音楽学分科会では、大学院修士課程1年次の必修科目「研究法基礎」の受講者数の増加等に伴い、具体的な個別指導が難しくなっているとのことだった。今後クラス編成を再考するとともに、2年次の論文指導の際に、基礎的な内容を含めて丁寧に指導する必要があることが共有され、実際に役立った。音楽と社会分科会では、実技指導教員から、音楽に関する広い領域に関心を持っているシニア学生の熱心な学びの姿勢が話題になった。そのような希望に対応するため、分科会担当科目である「芸術鑑賞応用」に設定している特別授業を活用した。

2025 年度(春学期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:0081 教員名:酒巻 和子

1)アンケート結果に対する所見

今回の対象科目は、大学院修士課程の「音楽文化研究Ⅰ」と学部・短大の「作曲家・人と作品」の2科目である。

「音楽文化研究Ⅰ」は、3名の担当教員により行われた。楽譜に焦点をあて、時代ごとにその変遷を学びながら社会や文化的な背景との関連を学ぶ。前回開講時2023年度との大きな相違は履修者数が7名から29名と大幅に増えたことである。前回は7名(100%)全員がすべての設問で「4」または「3」の回答であったが、今回は回答者21名(72.4%)のうち、どの設問にも1、2名が「2」を選択していた。たしかに興味があって選択したものの、難しい印象を受けた学生がいたように読み取れた。総合的には、毎回の課題や、最終回でのまとめとディスカッションを活用したことにより、大幅なマイナスにはなっていないことも確認できた。前向きなコメントが今後の励みになった。

「作曲家・人と作品」は新カリキュラムの半期科目である。旧カリキュラムの通年科目「作曲家・作品研究」から改訂されたもので、もう1クラスの担当教員とシラバスを共有している。例年好評の「授業内発表」を継続したためか、Q10の総合満足度は「4」が100%であったことと、Q8「自分はこの授業の教育到達目標を達成できた」に自信をもって「4」または「3」と回答していることに安心した。

2)要望への対応・改善方策

特に要望はなかったが、わかりやすく伝えるための工夫は常に必要と思っている。大学院でも学部・短大でも学修歴によって基礎知識や経験がそれぞれ異なることを忘れず、細やかに理解度を確認するようにしたい。「音楽文化研究Ⅰ」では授業内課題の提出、「作曲家・人と作品」では授業内発表が有効である。それぞれ個別のフィードバックを丁寧に行うように努めようと考えている。

3)今後の課題

出席率については、今回はいずれの科目についても高い数値が示された。今後は回答率の向上を図るとともに、履修中の学生と向き合いながら潜在的な課題を見つけて、その都度適切に対応できるようにしたい。

以 上

2025 年度(秋学期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:0081 教員名:酒巻 和子

1)アンケート結果に対する所見

秋学期に個人で担当した科目は、「西洋音楽史特殊講義 A」(修士)と「西洋音楽史研究Ⅱ」(修士)である。「西洋音楽史特殊講義 A」では、担当クラスの学生は授業内発表にも積極的に取り組んだ。例年授業内容が多く、進度も速くなる傾向があるため、配付資料の充実を図った。アンケートでは Q6(わかりやすくするための工夫)と Q8(授業の目標を達成できた)で昨年度より高くなり、工夫が報われたように思う。「西洋音楽史研究Ⅱ」は隔年開講の選択科目である。担当領域はバロック時代の宗教曲というテーマであるが、前回からシラバスを見直し、ドイツの割合を調整し、イタリア、フランス、イギリス各国の特徴も把握できるように改めた。その結果 Q7(ものの見方や考え方が広がった)、Q8(目標達成)、Q10(総合満足度)の数値が高くなったほか前向きな記述もあり、励みになった。

学部・短大では、2025 年度はセメスター制導入に伴う新カリキュラムへの移行期であり、アンケートはその検証ととらえることもできた。「音楽評論基礎」(音楽と社会必修、学部音楽教養選択)は 3 人の教員それぞれの担当回数も半減したが、意欲ある学生たちのおかげで結果は通年の時と変わらず高い数値だった。「作曲家・作品研究」では「旧カリ対応の履修方法がわかりにくかった」という記述がみられた。音楽と社会分科会の改編科目「芸術鑑賞応用Ⅰ」では「たくさんの芸術作品を深く鑑賞することができた」、「芸術鑑賞応用Ⅱ」では「アンサンブル発表で親交を深めることができた」という記述があり、まさに意図した成果が得られたと思う。旧カリの「卒業研究」も無事に成果発表につながった。音楽学分科会担当科目「音楽芸術運営特別演習② 音楽と文化」(修士)も、充実ぶりのわかる結果といえる。部会を横断する複数教員が担当する「音楽指導論特殊講義」(修士)では、授業の意図もしっかり受け取られていると思える結果であった。音楽教養分科会担当の「音楽教養表現Ⅰ」についても、現状を確認できた。

2)要望への対応・改善方策

旧カリ対応に必要な科目はまだ残る可能性がある。学生に不利益が生じることをないようにしたい。分科会担当の科目については、日頃から現状を共有し、必要に応じて早期の対応と善に努めるようにする。

3)今後の課題

各担当科目では、わかりやすい授業のための工夫を続け、学生の状況把握に努めたい。同時に、修士の学生に対しては自ら学修・研究するための力を養うために、図書館のデータベースの利用方法紹介など、積極的に支援できればと思う。

以 上